広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもは”はずかしさ”をどうとらえているか
Author(s)	粕谷，典子
Citation	児童の言語生態研究 , 7 : 45 - 50
Issue Date	1975-05-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045082
Right	
Relation	

授業レポート（その二）

子どもは〝はずかしさ〟をどうとらえているか

粕谷典子

学習指導案

一、日時　昭和四十八年九月二十七日（木）第三校時
二、第三学年一組、男二十三名、女十九名、計四十二名
三、授業形態・全体授業
四、学習領域　感情・構え
五、教　材　雨と太陽（東書三ノ上）
六、単元設定の理由

この期の子どもたちの特徴の一つとして、自我意識がめばえ、自分と他人との関係について考えはじめ、他人に見られているということを意識するようになってきていることがあげられる。

特に、他人に見られているという意識は、潜在的に、はずかしさをつきまとわせている。それは、表題の、「雨と太陽」に象徴されるように、つのり、そして、やがてはれるものである。しかもそれは、たあいない原因によって起り、そして何かを契機としてはれる。また、はずかしさは人により、そのまま外にあらわれるとは限らないが、内外ともに何らかの意識的なかたち――「構え」をつくるものである。それらを含めて、はずかしさというものは、人間の成長の段階でそれぞれそれなりの構造を持っていると考えられる。

しかし、子どもたちの持っているはずかしさは、きわめて観念的であり、「はずかしい」と感じたら、そこからなかなか脱け出しにくい。

このことは、はずかしいということについて、子どもたちの感情の癒着状態と考えることができよう。

このような状態の子どもたちの変革を求めるには、感情のとらわれをほぐし、更に感情を分化させることが必要である。しかも、それは、教師の指示によって概念的に求められることではなくて、子どもたち自身の感情の分析に待たなければならないし、それへの気づきが喚起されなければならない。

この教材で、はずかしいという感情状態をときほぐし、子どもたちの今日的状態のはずかしさから、脱却をはかり、構えを転換させることをねらいとして、単元を設定した。

七、目　標

○はずかしさというこころの仕組み
○はずかしさの「構え」の転換

八、指導計画（九時間　扱い）

○通読、空白部分をうめ、二者択一をする。（二時間）
○空白部分、択一部分の言葉を関連づけさせる。（一時間）……本時
○はずかしさが崩壊していく過程を考える。（三時間）
○はずかしさが崩壊したあとを考える。（二時間）
○まとめ・確認（一時間）

九、本時目標

○空白部分、択一部分の言葉を関連づけさせ、はずかしさのあらわれ方について考えさせる。

十、本時の展開（別記）

十一、評　価

○子どもたちが、感情をどれほどことば化するか、そのためにどのような知恵を働かせるか。
○人による、はずかしさの構えのちがいを、とらえることができたかどうか。

十、本時の展開

学習内容	指導内容	留意点	備考	時間
1. 学習のねらいの確認	○はずかしさのあらわれ方について考えさせること。（言葉の関連づけ）	○学習の姿勢・集中をはかる。		
2. 通読する。	○指名読みさせる。	○ねらいに留意しながら聞くことを喚起する。		5分
3. 本時でとりあげる部分を教師が範読する。				
4. 空白部分、択一部分の言葉をながめる。	○黒板に、子どもたちが書いた言葉のいくつかのパターンを示す模造紙をはり、それを見せる。	○それぞれのパターンの特徴をつかむように、させる。 ○パターンは、三～四に制限する。	○もぞう紙に子どもたちの答を書いておく。	30分（それぞれについて7、8分ずつ）
5. それぞれのパターンについて、一つずつ見ていき、おかしいと思う点を話しあう。	○はずかしさのあらわれが、空白部分と択一部分で、矛盾なく、つながっているか、考えさせる。 ○子どもたちの質疑応答を中心として、進める。 ○はずかしさのあらわれ方がどの様になっているかを考えさせる。	○空白部分と択一部分を関連づけさせる。 ○それぞれのポイントをしぼってやる。		
6. 子どもたちの到達点を、教師が確認する。		○子どもたちの発言によって整頓する。		5分
7. 今後の課題を知らせる。				

資料

雨と太陽

あるばんのことでした。文助（ぶんすけ）の家に、おとうさんの友だちが四人もいっしょにたずねて来ました。

ところが、いざ帰るという時になって、急に雨がふってきました。文助のおかあさんは、げんかんにおいてあったかさを、みんな、お客さんにかしてあげました。

次の日の朝になりました。雨は、まだやんでいませんでした。

「ぼくのかさがありませんよ。」

と、文助がいいました。

「こまったわね。あなたのかさも、ゆうべ、お客さんにかしてあげてしまったのよ。きょうは、文助さん、おかあさんのでがまんしてね。」

と、おかあさんはいいました。

さあ、たいへんです。おかあさんのこうもりときたら、むらさき色で、太い短いえの先に、赤い大きな玉がついているのですから。

でも、しかたがありません。文助は、とうとう、おかあさんの、きれいな、むらさき色のこうもりをさして出かけました。赤い玉の所を□ように、両手でにぎりました。そして、なるべく顔も□ようにくふうし、□顔つきをして、□歩いて行きました。

女の子が二、三人、何かいいながら、後ろからやってくるようです。□文助には、こうもりというものが、こんなに□感じられたことは、はじめてです。文助は、はずかしくてはずかしくて、たまらなくなりました。そこで□と思いました。

すると、その時、文助の目の前に、ぱっと、まっかなこうもりがあらわれました。

「おや。」

と、思わず立ち止まって見ると、まっかなこうもりの下から、久太（きゅうた）のまるい顔が出ました。

「おはよう、文助君。あははは……。君は、むらさきかい。」

と、久太は、ふだんとはちがう／いつものとおりの／元気のない／元気な声で

いいました。
「ああ、そうなんだよ。ゆうべ、おとうさんの友だちが、四人も来たのさ。で、うちのかさ、みんな持って行ってしまったんだ。だから、きょうは、ぼく、おかあさんのをさして来たんだよ。」
文助は、〔だれかに何かいわれたら、すぐにいってやろう／だれかに何かいわれても、いわないでおこう〕と思っていたことを、〔すらすらっと／しぶしぶ〕久太にいってしまいました。
「そうかい。ぼくのはね、ねえさんのなんだよ。けさ、中学のにいさんがね、ぼくのこうもり、持って行ってしまったんだ。それで、しかたがないから、ぼく、ねえさんのをかりて来たんだよ。ほら、ここの所に、ひよこがついているんだぜ。黄いろいひよこがさ。」
「ぼくのは、赤い玉さ。」
「なるほど。あははは……。」
と、久太は、〔ゆかいそうに／つまらなそうに〕わらいました。

ふたりは、ならんで歩いて行きました。
学校の近くへ来ると、子どもたちが、だんだん、おおぜいになってきました。お寺の前まで来た時、向こうの横町からやってきた光一(こういち)が、ふたりを見つけて、
「どうしたんだい、君たちのこうもりは。あはははは……。」
と、いきなりわらいだしました。
「とてもはずかしいんだよ。ねえさんのでね。」
「ぼくのは、おかあさんのさ。」
「へえ……。自分のは、どうしたんだい。」
「にいさんがさして行ったんだよ。」
「ぼくのは、お客さんにかしたんだ。」
「それじゃ、しかたがないなあ。でも、君たちの顔はすごくきれいだぞ。久太君はまっかで、文助君はむらさきだ。」
学校に着きました。すると、かさ立ての所でごちゃごちゃしていた、おおぜいの友だちが、すぐに、ふたりのこうもりを見つけて、わらいだしました。けれども、光一がふたりの代わりにせつ明してくれたので、だれも、ばかにする者はありませんでした。

帰るころになって、雨はやみました。
終わりのベルが鳴りました。かさ立ての所まで出て来た文助は、
「おい、久太君。こうもり、わすれるなよ。」
と、□声でいいました。
「わかっているよ。」
と、久太は手をふりました。
ふたりは、きれいな色のこうもりをかかえて、学校を出ました。雨あがりの秋空は、とても美しくすみわたり、太陽が明るくかがやいていました。
「おい、文助君。こうもりをかわかしながら帰ろうや。」
と、久太がいいました。
「うん。それがいいや。」
と、文助は答えました。
ふたりは、□日の当たる通りを歩いて行きました。
曲がりかどまで来ると、久太は、
「じゃあ、さようなら」
と、まっかなこうもりの下から、右手を上げました。
「さようなら。また、あしたね。」
と、文助が元気よくいいました。
文助は、ひとりになりました。けれども、□かさに日が当たって、文助の顔は、ますますむらさき色にかがやきました。

「〝雨と太陽〟の授業を卒えて」

子どもは〝はずかしさ〟をどうとらえているか

「おまえでも、はずかしいということがわかるのか。」などと茶化していう言葉を耳にすることがある。この言葉の裏には、「はずかしさ」を捉えることのできる人間の方が、それのできない人間よりも、一つ上の段階にいるという気持が見られる。
たしかに、自我意識がめばえ、自分と他人との関係についても考えるようにならなければ、はずかしさを有することはできないと言えるであろう。それはまた、自分と他人、あるいは、自分とそれを見ている自分、というように、自分と何者かの二者関係を意識するところには、はずかしさがつきまとってくるということでもある。
ここで、気をつけなければならないのは、はずかしさを捉えたからといって、はずかしさという感情において、大人と子供とは、果して同じであると言えるかどうかということである。
はずかしさは、たあいない原因によって、つのったり、はれたりする。また、はずかしさは態度にあらわれるものであるが、内心がそのまま外にあらわれるとは限らず、その人の「構え」を伴うものである。そし

て、それらも合めて、はずかしさというものは、それなりの構造を持っていると考えられる。

そのような、はずかしさの構造を、子供たちはどの程度把握しているのであろうか。言いかえるなら、はずかしさということについて子供たちの感情は、どのぐらい分化しているのであろうか。

このことを、研究授業の前段階として調査した資料にもとづき（ここでは授業内容には触れず）調査結果に関してのみ考察する。

○調査形式と方法……別紙の資料の空白をうめ、二者択一をする。

○調査目的……「子供たちは、はずかしさをどうとらえているのか」を知る。

○調査結果と考察

資料は三枚あるのだが、はずかしさをどう捉えているかを見るのに、最初の二枚で十分であると思われるので、表は二枚分だけにした。（別記）

これを見て、まず言えることは、子供達は一度思いこんだら、それをなかなかくずすことができないということである。子供達のはずかしさというのは、いかに観念的であるかがわかる。

それぞれの問題について見てみると、最初の、はずかしさの原因となっているものをかくそうとする行為は、比較的とらえやすいようである。ところが、次の「できるだけまじめな」というように、はずかしいと感じていることを表に出さないようにしようとする行為は、とらえられていない。「はずかしそうな」とか「いやな」とか、はずかしさをそのまま表に出していると捉えている子供が多い。構えが固いと言うべきであろうか。

そのことは、次の答にも見られる。「大急ぎで」というように、はずかしさから、早くのがれようとする気持よりも、「のそのそ」「ゆっくり」というように、「はずかしい・いやだ」という気持にどっぷりつかったまま、そこからぬけ出すことができずにいる。

「きっと、かさのことを笑っているにちがいありません。」のところは、彼我関係をあらわしている。そして、彼我関係こそ、はずかしさの構造の中心をなすものだと思われる。その大切な部分をつかんでいる子供が30%ぐらいであることは、子供達にとって、はずかしさの構造を把握することが、いかに難しいことであるかということを意味していると思われる。

その次の、「大きく・重く・やっかいに」というのは、子供達には大変難しいところだと思う。「大きく・重く・やっかいに」というのは、かさのことではあるが、それと同時に、その子供の感情でもある。感情を計量することは、子供達には難しく、その計量感情をかさを通してあらわすというのは、ますます難しいことであろう。正答数は一番少ない。しかし、正答をえられている子供もいるということは嬉しいことである。「やっかいに」とか、さらに、一人だけではあるが「におもに」という言葉が入っているということは、注目

正答者人数	29/41	32/41	(10) 8/41	15/41	10/41 (+5)	9/41	10/41	30/41	28/41	33/41	38/41
正答	(見えない) かくす	(見えない)	できるだけまじめな	大急ぎで	きっとかさのことを笑っているのにちがいありません	大きく，重く，やっかいに	いっそのこと，かさをつぼめてかけだそうか				
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4
亀甲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
桐生	○	○	はずかしそうな	かくすように	はずかしそうに歩いていきました			○	○	○	○
伊藤勲	○	○	下を向き見えない	ちぢめるように	△ 文助は，何か言われなければいいなと思った	いやではずかしいなと	? むらさき色のかさをかくしていそいでいこう	○	×	○	○
有賀	ふるえる	○	しょんぼりしている	そのその	はずかしいと思いました。	たまがついていた	はずかしくなりました	○	×	×	○
ながしま	つつむ	○	しょんぼりな	のそり	へんな気持ち	へなことが (?)	? かくす	○	×	○	○
鈴木	○	○	○	○ 走るように	○	○ おもくてじゃまに	○	○	○	○	○
原島	○	○		びくびくしながら	みつかったらいやだなと思った	○		○	○	○	○
安田	○	○	いやな	とぼとぼ	どうしようかな，かけて学校に行っちゃおうかな	やなこと	はやくいっちゃおう	○	×	○	○
菅野	○	○	○	○	○	へんに	文助がはずかしいな	○	×	○	○
菅原	いやな	○	はずかしそうな	しらんぷりで	すごくはずかしくって	はずかしいことは	誰か男の子が女のかさをやってこないかな	○	~	○	○

くまくら		○		○			かけ足でいきたいな　でも	×	○	×	×
瀬　藤	○	○	はずかしそうな	とぼとぼ	ぼくに気がつかないでそのまま行ってしまえばいいな	○ 大きくて　におもに	○ こんなかさなんかすてちゃえ	○	○	○	○
河　原	○	○	はずかしそうな	すこし早く	△ あの子たちぼくのことうわさしているかな，まがっちゃえばいいな	いいのかな	はしっていこう	×	○	○	×
佐々木	○	○	○	すまして	○	いやだなーと	○	○	○	○	○
出　井	はずかしい	しらない	しずかな	○ 早く	はずかしくて，すごくやな気もち	やな気もちだ	早くかけ足をしました	×	×	×	○
服　部	○	わからない	はずかしそうな	のろのろ	いやな気もちだな	はずかしく	こんなかさいやだな	○	×	×	○
さいとう	○	○	○	すまして	○ もしかしたら，このこうもりのことをわらっているのかも	○ じゃまに	○	○	○	○	○
井　上	○	○	とてもいやーな	○ さっさと	△ きっとボクのことを話しながらきてるんだな	はずかしく	○	○	○	○	○
荻　原	ふるえる	○	しょぼしょぼのような	のそのそ	いやだなみつかったらたいへんだぞはやくにげろと	たまがついているかさはへんだと	はずかしくて　こんなかさしたくない	○	×	×	○
木　内	○	目だたない	はずかしそうな	とぼとぼ	○	いやなものに	いっそう　ここから学校までつっぱしるか	○	○	○	○
小野田	ばかにされる	顔はずかしい	はずかしい	へんなあるき方を	はずかしそうに歩いていた	はずかしそうだ	こうもりがさをさしていくのはやだ	×	?	○	○
はまして	ぎっしりとつかむ	しょぼんと	へんな	だるい	どうしようと思った	いつもとちがっている	文助は学校にいかない	?	○	×	○
松　山	はずかし	くやしい	こわそうな	やなかんじ	はずかしくて，もう困るようにふるえている	たっているとみんなにかさのことが	文助はがまんしながら学校へ行きたいな	○	○	○	○
中　田	つつむ	○	○ なるべくしんけんな	○ かけながら	文助ははずかしいから，かおをかくそうとしました	○ はずかしいと思って，やっかいに	○	○	○	○	?
しまばら	○	○	赤い顔をして	ゆっくり	文助君は，はずかしくて，どこかにかくれようとした	とてもはずかしいように	しらんぷりしてあるこう	○	○	○	○
森	○	○	○	○ さっさと	はずかしいはずかしいと思った	いやになるということを	早く行こう　早く行こう	○	○	○	○
並　木	○	○	へんな	赤い顔				×	○	○	○
小　高	○	○	はずかしいような	○	はずかしそうにあるいていた	はずかしそうに	文助は思いきって勇気をだそう	×	○	○	○
塚　田	○	?	いやな	ゆっくり	どうしよう　やだな　やだなどうしよう	いやだ	?	○	○	×	○
原	○	赤くない	○ ふつうに	かさにかくれて	△ 文助君は　やだなー女のこが笑っている	はずかしくて	こんなかさは　やだなー	×	○	○	○
天　明	いやいやの	○	はずかしそうな	そろそろと	困ってしまいました。かさの中にかくれました	おかあさんのこうもり	?	○	○	○	○
篠　崎	○	○	△ にこにこする	のっそり	いやな気持ではずかしい	へんなきもちで	こんなかさはやだなあ	×	×	○	○
加々美	○	○	こまったように	ゆっくり	いやだなあ。はずかしいなあ，どうしよう，かっこわるいな	はずかしいんだな	すごく，こまってしまった	○	○	○	○
綱　渕	○	○	○	○	○	○ 大きくておもくて，はずかしく	○	○	○	○	○
島　村	○	たのしい	きょろきょろ目を動かし	○	△ 悪口をいわれたり笑われたりする	へんな	他に同じようなかさをさした男の子がいないか	○	×	○	○
高　橋	○	○	はずかしい	○	はずかしいな	はずかしくにくいことを	○	○	○	○	○
目　時	いやな	○	?	いやなきもちで	学校に知らせるから，いやだなと思う	いやだったのかな	○	?	×	×	○
関	○	○	おこるような	○	○ ああ，どうしようかな，笑われるかなと思った	はずかしい	かけ足をして急いでいこう	?	○	○	○
伊藤（とおる）	○	○	はずかしいような	少しずつ	はずかしいと思い，見られたらやだなー，学校へ行ってみんなにいわれる	はずかしい	文助は，こんなこうもりはも　いやだ	○	○	○	○
松　本	○	○	赤くなったような	○ 走るように	○	○ やっかいに　はずかしく	学校まで走っていこうか	○	○	○	○
茂　木	○	○	○	○	○	○ 大きく，やっかいに	いっそのこと学校までかけていこう	○	○	○	○

すべきであろう。

一枚目最後の問題である、はずかしさの原因となっているものの放棄もまた、正答が少ない。追いこまれた気持、はずかしさがどんどんつのって、最高の状態になっているということが、つかめていないようである。

一枚目全体の結果としては、「はずかしい」という言葉がはいっているところが、圧倒的に多い。はずかしいと感じたら、その感情をそのまま表にだすという、一つの構えしかとれない子供が多いということであろう。

二枚目の問題については、択一問題であったためか、一枚目の問題よりも、ずっと正解が多かった。

最初の問題で、「ふだんとはちがう・元気のない」の方を選んでしまった子供は、久太を文助と同じように見てしまったのであろう。ここで興味があるのは、〜の記号になっている子供である。これは、一つの答となる文を、上の部分と下の部分に分けて考えているものである。そして、注目したいのは、「ふだんとはちがう、元気な」と答えていることである。これは、明らかに、「よそおう」「ふりをする」ということをつかまえている。正解ではないにしても、「よそおう」という、はずかしさの構えの一つをとらえている点でおおいに注目したいところである。

次の、「だれかに何かいわれたら、すぐにいってやろう」をまちがっている子供は、はずかしさを、ひたすらかくすことだけに、気持がいっているのであると思われる。

次の問題の誤答も、同じことが言える。

最後の問題が一番正解が多い。これは、子供達が、正解を選ぶ力があったのに加えて、私の問題文が良くなかった事も、その原因になっているのではないかと思われる。択一文として、「ゆかいそうに」に対して「つまらなそうに」というのは不適当であったと思う。

全体を通して、正解だったのは三名である。一問だけ誤答であり、しかも正解に近いと思われる答をいれている子供は、四〜五名いる。1/5の子供は、はずかしさの構造がつかめていると言えるであろう。しかし、この他にも、正解に近づきつつあると思われる答を入れている子供が何人かいる。たとえば、最初の問題の「かくす」のところに「つつむ」という答をいれている子供などは、かくそうとする気持がひそんでいることを、うかがうことができる。

表にした部分は、はずかしさが、どんどんつのっていくところ、そして、構えの違いをとらえているかどうかを見たものであって、感情処理ということは問題としていない。ところが一人だけではあるが、すでにこの問題で、感情処理の動きを見せている子供がいる。（小高。）「かくす」「かくす」「はずかしいような」「大急ぎで」「はずかしそうにあるいていた」「はずかしそうに」と答えてきて、その次が「文助は思いきって勇気をだそう」という答になっている。「はずかしそうに」から「……勇気を出そう」という答になる間に激しい動きがあると見るべきであろうか。この飛躍は、どう解釈すればよいのか。

はずかしさに直接関係があるかどうかはわからないが、「ちゃう」という言葉が気になる。これは、はずかしさの原因となっているものの放棄のところで見られる言葉である。「はやく行っちゃおう」「こんなかさなんかすてちゃえ」というものである。この部分で「行ってしまおう」「すててしまえ」と答えられないものを感じてしまう。「……ちゃう」というのは一種の方言であると見る向きもあるようであるが、少なくとも、はずかしさの放棄における「ちゃう」は、別の意味を持つと思われる。そこには、時間的なもの、思いきりの良さなどを感じとることができる。「ちゃう」としか表現できない逼迫感が見られる。

最後に、子供達のはずかしさのとらえ方を一言でいうならば、それはまだまだ観念的であるが、構造をつかみかけて動めいている状態であると言うことができるであろう。

感情構造を分析し、自分自身の感情を見つめていくことが、子供達には必要とされる。概念として得るのではなく、自分自身の感情を分化させ深化させる事、自分の感情を分析することが大切である。そして、教師は、それへの気づきを喚起し、感情構造のときほぐしに手をかさなければならない。そうするためには、教師自身が感情構造をしっかり把握していることが必要とされる。子供達の感情の発達を願うならば、教師自身、感情の分化、深化をはからなければならないということであろう。心がけたいことであると思う。

ここでは、はずかしさの感情処理の方には触れなかったが、それも考えていかなければならないことだと思う。はずかしさはつのっていくが、どこかではれるものである。その時の感情処理のしかたによって、子供達の性格を知ることができるかもしれないと思う。子供達の実態を知るためには、欠くことができないものであろう。「雨と太陽」という教材では、はずかしさがつのっていくところ、「構え」を見るのに適当であると考えて、そちらを重視しなかったが、感情処理を見る方法を考えて、子供達の実態を、もっとよく見てみたいと思う。

（東京・松ケ丘小・教諭）